系統の本の成立が古今集以前にまで遡ることを得ないといふ重要な證據とすることが出來る。鎌田正憲氏は、嘗て伊勢齋宮の條を卷頭に出した狩使本を以て、古今集に先行する原撰伊勢物語と推定されたが、その推論に誤を導いた根本の原因は、氏の所謂狩使本なるものの眞の形態が把握されなかつた點にある。換言すれば、小式部内侍本が現在傳爲氏筆本によつて見得る如き二十四段を包含してゐるといふ事實が、氏によつて認識され得なかつたためである。

又これと逆に、小式部内侍本の成立が朱雀院本よりも後とする見方も必ずしも不可能ではない。元來組織的であつたものが、何等かの機會に於て散亂し、それが再び整理し直される時に、順序の亂れることは往々見受けられる所である。加之、平安朝中期以前の本の裝幀としては、大體卷子本の方が多かつたとして誤ではなからう。伊勢物語はその分量よりすれば、卷子本二卷乃至三卷が適當と思はれるが、若し三卷と假定するならば、現存朱雀院本系統の諸本に於て、略三分の二の箇所(定家本にあつては百二十五段中の第六十九段)に位置してゐる狩の使の段は、第三卷の卷頭に出るべきであることも、注意されねばならない。尤も小式部内侍本の段序が、若し東京帝室博物館所藏世尊寺行尹筆伊勢物語繪詞の摹本のそれの如きものであるならば、右の推定は自然放棄されねばならぬかも知れない。この摹本は三卷より成つてゐるが、その各段が如何に配列されてゐるかを、天福本を基準として示せば、

卷一　第六十九段・第七十七段・第九段・第四段・第五段

卷二　第一段・第八十一段・第八十二段前半と第八十三段後半・第六十五段前半・第六段・在原業平住吉に云々の段

卷三　第二十四段・第十四段・段十二段・第六十六段・第八段・第二十三段・第十一段

右の如くであり、卷頭に狩の使の段、最後に空ゆく月の段を置き、在原業平住吉に云々の段を有する點は、小式部内侍本の組織と甚だ類似してゐる。然し本書の如きは、僅かに十八段前後の拔粹に過ぎない。仍て小式部内侍本の形態を規定した際の四條件を悉く滿足させることも不可能であり、且小式部内侍本の本文として殘存する二十四段と比較を行ふべき由もないのである。從つてこの繪詞を小式部内侍本の系統に屬するものと認定し、この段序を以て小式部内侍本のそれを推

定するが如きは、たとひ一二の類似點ありとしても、尙危險を伴ふものなることを考へねばならぬ。加之、卷二の卷頭に第一段の存する點を重視すれば、或は本書の段序の如きも組織的な朱雀院本系統の段序から派生したと說明され得るかも知れないからである。

要するに雜纂的の形態が、組織的なそれより派生したと想像することは、尙その逆の場合の自然なるに及ばないであらう。然らば、小式部內侍本は形態としては朱雀院本に先行すべきものであらうが、それにしても現在想像される內容よりすれば、天曆を遠く遡る成立とは思はれないと斷せざるを得ないであらう。

第四項　結語

伊勢物語の成立年時に關する從來の諸說は、これを(一)延喜以前(古今集以前)と認めるもの、(二)承平・康保間と認めるもの、(三)天曆以後(後撰集以後)と認めるもの等に概括することが出來る。而してこれ等の諸說に對して、筆者は次の如き一の假說を抱いてゐる。それは、

伊勢物語が歌物語としての形態を一應整へた時期は、略古今・後撰の間であり、それが現存諸本に見るが如き形態をとるに至つたのは後撰集以後に相違ない。

といふのである。

しからば、かかる假說は如何にして立てられるかといふに、これには二の根據が存する。その一は勢語諸傳本の比較研究から歸納された結論に基くものである。之を詳しく言へば、勢語の現存諸傳本卽ち定家本・古本・眞名本・大島本・朱雀院塗籠本及び參考伊勢物語に依つて想像せられ得る爲家本相互の間には、章段にして出入するもの少からずと雖も、しかもなほ何れの本にも必ず共通して存在する所の百五段が認められるといふ事實に基くのである。その諸本共有の百五段とは左記の諸段である。

むかしおとこうゐかうぶりして(第一段・うひかうぶり)
むかしおとこ有けりならの京は(第二段・西の京の女)
むかしおとこありけりけさうしける女の(第三段・ひじきも)
むかしひんかしの五條に(第四段・西の對の女)

むかしおとこ有けんひんかしの五條わたりに(第五段・ついぢのくづれ)
むかしおとこありけり女のえうましかりけるを(第六段・芥川)
むかしおとこ有けり京やすみうかりけん(第八段・淺間の嶽)
むかしおとこありけりそのおとこ身を(第九段・八橋・うつの山・富士の山・すみだ川)
むかしおとこ武藏のくにまて(第十段・みよしの丶里)
昔おとこあつまへゆきけるに(第十一段・空ゆく月)
むかしおとこ有けり人のむすめを(第十二段・むさし野)
昔武藏なるおとこ(第十三段・むさし鐙)
むかしおとこみちのくに丶(第十四段・栗原のあねはの松)
むかしみちのくに丶てなてうことなき(第十五段・しのぶ山)
むかしきのありつねといふ人(第十六段・紀有常)
年ころをとつれさりける人の(第十七段・あだなりと名にこそたてれ)
むかしなま心ある女(第十八段・紅ににほふがうへの白雪)
昔おとこ宮つかへしける女の(第十九段・天雲のよそ)
むかしおとこやまとにある女を(第二十段・かへでの紅葉)
むかしおとこ女いとかしこく(第二十一段・おのがよ丶)
むかしはかなくて(第二十二段・秋の夜の千夜を一夜)
むかしゐなかわたらひしける人の(第二十三段・つ丶ゐづつ)
むかしおとこかたゐなかに(第二十四段・あらたまの年の三とせ)
むかしおとこ有けりあはしとも(第二十五段・秋の野に笹分し朝の袖)
昔おとこ女のもとに(第二十七段・水口に我や見ゆらむ)
昔いろこのみなりける女(第二十八段・あふこかたみ)
むかし春宮の女御の(第二十九段・花の賀)
むかしおとこはつかなりける女の(第三十段・あふ事は玉の緒ばかり)
昔宮の内にて(第三十一段・よしや草葉のならむさが)
むかしおとこつのくに(第三十三段・こもりえにおもふ心)
むかし心にもあらて(第三十五段・玉の緒を泡緒によりて)

昔わすれぬるなめり(第三十六段・谷せばみ)
昔おとこ色このみなりける女に(第三十七段・我ならで下紐とくな)
むかしきのありつねかりいきたるに(第三十八段・君により思ひならひぬ)
昔わかきおとこ(第四十段・あかぬわかれ)
昔女はらから(第四十一段・うへのきぬ)
昔おとこ色このみとしる〳〵(第四十二段・誰が通路)
むかしかやのみこ(第四十三段・しでの田長)
むかしあかたへゆく人に(第四十四段・われさへもなく)
むかしおとこ有けり人のむすめの(第四十五段・飛ぶ螢雲の上まで)
むかしおとこねんころに(第四十七段・大幣)
昔おとこ有けりむまのはなむけ(第四十八段・人またむ里)
むかしおとこいもうとの(第四十九段・ねよげに見ゆる若草)
昔おとこ有けりうらむる人を(第五十段・あだくらべ)
昔おとこ人のせんさいに(第五十一段・前栽の菊)
むかしおとこありけり人のもとより(第五十二段・かざり粽)
むかしおとこあひかたき女に(第五十三段・いかでかく鳥のなくらむ)
昔おとこつれなかりける女に(第五十四段・ゆきやらぬ夢路)
むかしおとこふして思ひ(第五十六段・わが袖は草の庵)
昔おとこ人しれぬ物思ひけり(第五十七段・われから)
むかし心つきて(第五十八段・長岡)
むかしおとこ京をいかゝ思ひけん(第五十九段・住みわびぬ)
むかしおとこ有けり宮つかへいそかしく(第六十段・花橘)
昔おとこつくしまで(第六十一段・染川)
むかし年ころをとつれさりける女(第六十二段・いにしへの匂はいづら)
むかし世こゝろつける女(第六十三段・つくもがみ)
昔おとこみそかに(第六十四段・玉すだれ)
むかしおほやけおほして(第六十五段・在原なりける男)
むかしおとこ有けりそのおとこ伊勢のくにゝ(第六十九段・狩の使)

昔おとこ伊勢の齋宮に(第七十一段・千早振神のい垣も)
むかしおとこ伊勢のくになりける女(第七十二段・大淀の松)
むかしそこにはありときけと(第七十三段・月の中の桂)
むかしおとこ女をいたうゝらみて(第七十四段・岩根ふみ重なる山)
昔おとこ伊勢のくにゝゐていきて(第七十五段・みるをあふにて)
むかし二條の后のまた(第七十六段・大原やをしほの松)
むかしたかきこ(第七十八段・山科の禪師のみこ)
むかしうちのなかに(第七十九段・わが門に千尋ある竹)
昔おとろへたる家に(第八十段・おとろへたる家)
むかし左のおほいまうちきみ(第八十一段・鹽竈にいつか來にけむ)
むかしこれたかのみこ(第八十二段・渚の院の櫻)
むかしみなせに(第八十三段・忘れては夢かとぞ思ふ)
むかしおとこ有けり身はいやしなから(第八十四段・千代もといのる人の子のため)

昔おとこ有けりわらはより(第八十五段・思へども身をしわけねば)
昔いとわかきおとこ(第八十六段・今までに忘れぬ人は)
むかしおとこ津のくにむはらのこほり(第八十七段・布引の瀧)
昔いとわかきにはあらぬ(第八十八段・おほかたは月をもめでじ)
むかしいやしからぬおとこ(第八十九段・人しれずわれ戀死なば)
むかしつれなき人を(第九十段・櫻花けふこそかくも)
むかし月日のゆくをさへ(第九十一段・をしめども春の限の)
むかしこひしさに(第九十二段・蘆べこぐ棚なし小舟)
むかしおとこ身はいやしくて(第九十三段・おふなおふな思ひはすべし)
むかし二條の后に(第九十五段・彦星に戀はまされり)
むかしおとこ有けり女をとかくいふこと(第九十六段・天のさかて)
むかしほり河のおほいまうちきみ(第九十七段・四十の賀)
昔おほきおほいまうちきみ(第九十八段・梅のつくり枝)
むかし右近の馬場の(第九十九段・右近の馬場のひをりの日)

むかしおとこ後涼殿の(第百段・わすれ草)
むかしおとこ有けりうたはよまさりけれと(第百二段・あてなる女の尼になりて)
むかしおとこ有けりいとまめに(第百三段・ねぬる夜の夢をはかなみ)
むかしことなることなくて(第百四段・賀茂の祭見)
むかしおとこかくてはしぬへし(第百五段・白露はけなばけなゝむ)
昔おとこみこたちの(第百六段・たつた川のほとり)
むかしあてなるおとこありけり(第百七段・藤原の敏行)
むかし女ひとの心を(第百八段・風吹けばとはに波こす岩)
むかしおとこともたちの(第百九段・花よりも人こそあだに)
むかしおとこみそかに(第百十段・玉むすび)
昔おとこやむことなき女のもとに(第百十一段・古へはありもやしけむ)
むかしおとこねむころに(第百十二段・須磨の蜑)
昔おとこやもめにてゐて(第百十三段・やもめにてゐて)
むかし仁和のみかと(第百十四段・芹川行幸)
むかしおとこ梅壺より(第百二十一段・梅壺)
むかしおとこちきれること(第百二十二段・井手の玉水)
むかしおとこありけり深草に(第百二十三段・深草にすみける女)
むかしおとこいかなりける事を(第百二十四段・思ふ事いはでぞ)
むかしおとこわつらひて(第百二十五段・終焉)

但し前掲の定家本・古本・真名本・大島本・朱雀院塗籠本・爲家本等の諸本は、何れも朱雀院本の系統に屬するものであつて、是等の諸本が右の百五段を共通に有するからといふ理由を以て、直ちに勢語諸傳本の凡てがさうであるといふ場合と同一に律することは許されない。初冠の段に始まり終焉の段に終る朱雀院本系統の諸本に於ては、それぞれの間に若干の章段の出入があつても、少くとも百五段だけは何れの本にも存するといふ特殊の事實を、勢語一般について言ひ得る事實として擴充する爲には、先づ朱雀院本と對立せる小式部内侍本についての檢討が怠られてはならない。しかるに、小式部内侍本の全本は現在に傳はらず、その全貌はもと

より知る由もないが、幸にして傳爲氏筆本の卷末に附載の二十四段を始め、顯昭古今集註・伊勢物語抄等の記事によつて、その大體を窺知することが出來る。今この小式部内侍本の本文の片鱗と推定される所の二十四段、和歌三十四首中、天福本に存しない歌を數ふるに、二十一首を算する。而して小式部内侍本の元來有したる和歌の總數は、傳爲氏筆本の傳へる所によれば二百五首であるといふ。故に若し、右二十一首以外の歌の全部が悉く天福本にも存する歌であると假定するならば、小式部内侍本は天福本と百八十四首の歌を共有する計算となる。これを天福本の平均一段につき和歌一・六七首の割合を以て段數に換算すれば、約百十段となる。卽ち小式部内侍本に於ては、若し現存二十四段以外を以て悉く天福本と同一の章段であると假定するならば、天福本と百十段を共通に有することとなる譯である。勿論これは兩者の共有章段を最大限に考へた場合であつて、實際に於ては十段や十五段の相違はあるものと豫想して置かなければならない。ただこの場合に一の不安となすべきことは、兩本が最小限度に於て幾許の章段を共有し得るかといふ想定の全く不確實なることである。然しこれも現存の貧弱なる資料よりしては、これ以上どうすることも出來ないであらう。

次には、傳爲氏筆本に、

或本云

これよりしもはこの本になきをえりいでてかきつらねたる也。小式部内侍が自筆の本にあるなり。

と記せる「或本」に對する解釋に基くものである。この「或本」とは如何なる系統に屬する本であるか明瞭でないが、とにかく右の所記より見て、小式部内侍本に存したといふ前記二十四段を有してゐない本であつたと解せられる。さすれば、その當然の結果として、右の二十四段中に存する天福本第三十六段・第七十一段・第七十三段・第七十四段・第九十五段・第百九段・第百十一段及び第百十五段の八段を有せざる本であつたに相違ないと言ふことが出來る。若しかかる本をも考慮に入れるとするならば、勢語諸本のすべてに共通に有する章段は、百五段から九十九段へと減少するであらう。又現在傳存せざる幾つかの異本を豫想するならば、此の數は更に今少し減少するかも知れない。

要するに、伊勢物語は諸本によつて、章段の數にも多寡があり、段序にも相違があり、語句にも異同を認めるのであるが、しかしその根幹をなす百段前後の章段に至つては、何れの本にも共通して出てゐるといふことが出來る。これは單なる臆測から來たものではなく、實に具體的な勢語の異本研究より歸納された結論である。今この結論が誤ないものとし、何が故にかかる事實があり得るかを考察するに、もと現存諸傳本の共同的祖先として、第一次伊勢物語の存在したことを豫想する以上に、より一層適切な理由は見出されないであらう。若し勢語の成立を、第一次と第二次とに分ち、第一次の成立に對してこれが段序を整理し、章段を增補し、語句を訂正せる第二次の成立を認めるならば、異本の發生を說明せんとする場合甚だ好都合である。即ち第一次伊勢物語に對し、若干の人々によつて各人各樣に章段の增補、段序の變更、語句の修正等が行はれ、かくして生じた若干の第二次伊勢物語は更に又互に接觸し合ふことによつて、前にまさる幾多の異本を形成し、遂に平安朝末期に見る如き諸本亂立の狀態を現出するに至つたと說明し得るからである。伊勢物語抄の所記に依れば、勢語傳本には三流があつて、その第一は初冠の段に始まり終焉の段に終り、第二はしでの田長の段に始まり終焉の段に終り、第三は狩の使の段に始まり空ゆく月の段に終るといふ。筆者は必ずしも、第一次伊勢物語の段序が抄の言ふ所の第二即ち業平朝臣自筆本と稱するものと同一であると斷定しようとは思はない。同時に又、第三即ち小式部內侍本と同じ形態であつたとも主張するものではない。ただ第一次の勢語は、現存諸本より章段も少く、且つ現存朱雀院本の如き整頓せられたる段序を有してゐなかつたに相違ないといふことだけは言はれ得ると思ふのである。

伊勢物語成立時期の推定に關する今一の根據は、伊勢物語と後撰集との關係に基くものである。已に典據論の條下に論證した如く、三代集と勢語との關係に於ては、古今・拾遺の二集が闡明されてゐるにも拘らず、後撰集に至つては甚だ明瞭を缺き、伊勢物語が素材の一部を後撰集に仰いだか、或は逆に後撰集が伊勢物語の歌を採錄したか、いづれとも容易に決定することは出來ない。從つて、勢語の成立が後撰集以前か以後かといふ問題は、無論解決出來ないわけである。しかし思ふに、かく兩者の關係が判然しない理由は、後撰集の成立に關與した伊勢物語と、後撰集

の影響下に於て増補された伊勢物語と、換言すれば第一次伊勢物語と第二次伊勢物語とが兩立し、後撰集がこの兩者の相互に連結してゐるためではないであらうか。少くとも、かく解することによつて、勢語と後撰とが如何に複雜な關係を有するかが認められるのである。

さて勢語の成立を二期に大別して、第一次第二次となす右の假説は、成立年時に關する推定説として、格別新奇なものではない。鎌田正憲氏には、已に原撰伊勢物語と粉飾伊勢物語と二種を認める説がある。しかし筆者の抱懷する假説と、鎌田氏のそれとの間には、自ら二つの相違點が認められる。今その差異について一應明かにして置かうと思ふ。第一は原撰伊勢物語(第一次伊勢物語)の成立時期を、鎌田氏は古今集以前と考へられるに對し、筆者は古今・後撰の間と推定する點である。第二は氏が原撰伊勢物語として小式部内侍本を認められるに反して、筆者はそれをも此の所謂粉飾伊勢物語(第二次伊勢物語)に編入せんとする點である。而してかかる見解の相違を來した所以について考へるに、それは專ら小式部内侍本の形態の認識如何に基因する。鎌田氏が小式部内侍本に關して知り得てをられた所は、僅かに狩の使の段を以て始まり、空ゆく月の段を以て終るといふ一事に過ぎなかつた。しかし傳爲氏筆本の出現したことは、我々をして假令二十四段といふ一部分に過ぎないとはいへ、なほかつ小式部内侍本自體の本文の姿に接するの機會を持たしめたのである。しかしてこれによつて想定される所の小式部内侍本なるものは、確かに古今集の影響下にあるもの、否むしろ天暦以後のものと結論せらるるを得ないのである。この新しい結論は零細なる資料の研究に導かれたものである。かの勢語に萬葉集の歌を採錄せる時期を天暦以後と規定する窪田氏の説を訂正し得たのも、諸本の比較研究の結果、第一次の勢語にも萬葉集の歌を認めることが出來た爲である。かかる例よりするも、根本資料の研究の忽にすることの出來ないものであることを知るのである。

次に、我々は先に新なる徵證として提起した左の二つの事項を想起することによつて、成立時代後撰集以後といふ漠然たる時期を、今少し限定しなければならない。

一、宇津保物語の引歌を論據とすれば、勢語の成立は遲くとも安和以前と推定さ

れる。

二、高二位本の成立は天慶以降長德以前と推定される。

これを前述の假說に適用すれば

一、第一次伊勢物語の成立は延長・承平・天慶頃であらう。

二、第二次伊勢物語の成立は略天曆以後安和以前であらう。

といふことになるのである。

要するに、古今集勅撰の大事業は、歌壇を刺戟して私家集流行の因をなし、業平崇拜の機運を醸し、ここに多くの業平集を社會の表面に浮び出させた。これ等の業平集の對立並に流行は、自ら集大成と統一との機運に向つて動き、一方戀愛贈答歌の模範和歌集としての、又趣味と實益とを兼ねた歌物語としての要求を加へつつ、ここに第一次伊勢物語を生み出すに至つたものと思はれる。古今集の撰進以後四十餘年、後撰集は古今集に漏れた歌と其の後の作とを撰集して成立した。後撰集は、ある意味に於ては古今集の增補であり、拾遺であると見ることが出來る。かかる意味に於ける後撰集の成立は、一方に於ては伊勢物語に對する大和物語の編

欠

第三章　伊勢物語の文學史的地位

欠

伊勢物語を單にその量より觀れば、渺たる一小冊子に過ぎないが、その文學史上に占める地位に於ては甚だ重要なものがある。

先づ我々は、伊勢物語が歌物語といふ特殊な文學形態を持つた最初の作品であることを注意しなければならない。文學形態の展開の上より歌物語を觀察すれば、それは歌集の詞書が物語へと發展する橋梁として、過渡的形態としての意義を有すると共に、それ自身また二の系列を作るものと言ふことが出來る。

從來伊勢物語と大和物語とは漠然と歌物語なる同一の名稱によつて包括されて來たが、この兩者を相ならべて、相互の關聯を考慮に入れ、微細な異同を比較しつつ、嚴密に考へて行くと、その成立の事情及び動機に於ていささか相違する所があり、作品自體の本質に於ても亦それぞれ異るものを持つてゐる。一方は抒情詩を含んだ小說であり、そこに浮き出て來るものは人であるが、他方は平面的な說話集であつて、そこに印象されるものは筋である。伊勢物語の系列には、平中物語・篁物語・多武峯少將物語等があり、大和物語の系列には今鏡に於ける敷島の打聞を初めとして、玄々集・今昔物語・袋草子・無名抄等を隔てて鎌倉時代の說話文學に連る一群

があゐ。若し前者にのみ歌物語の名稱を附與するならば、後者には和歌說話集とでも名を附して區別した方がよいかも知れない。しかし兩系列共伊勢物語に源を發してゐることは疑ない事實と思はれる。

次に內容の方面について見るに、伊勢物語は後世の文學に著しい影響を與へてゐることを知るのである。今その代表的なものについて略說しよう。

第一に伊勢物語中の數段と略同一の題材を扱つてゐるものに大和物語がある。例へば、後者の第百四十四段・第百五十六段・第百五十七段・第百五十八段・第百五十九段・第百六十段・第百六十一段等の諸段は、前者の第二十三段・第三段・第七十六段・第百段・第五十一段・第五十二段・第百二十五段・第九十九段と略同一の內容を有してゐる。

今昔物語の卷第二十四、在原業平中將東の方に行きて和歌を讀む語及び業平右近の馬場に於て女を見て和歌を讀む語は、伊勢物語の第九段及び第九十九段・第八十二段・第八十三段に材を取つたものである。

伊勢物語に取材した謠曲については、佐成謙太郎氏が日本文學大辭典に於て、雲林院・井筒・小鹽・杜若の四番を擧げて居られる。雲林院は伊勢物語の全般に亙つたものであり、井筒は第二十三段、小鹽は第七十六段、杜若は第九段を主材としたものである。

次いで近松の作品では井筒業平河內通、下つて奈河龜助の競伊勢物語の二者、何れも題材を伊勢物語に求めたものである。

以上の外、伊勢物語にもちつた戲作として、仁勢物語・新町をかし男（後に吉原伊勢物語として再版する）好色伊勢物語（元祿七年いくのの草紙と改題出版されてゐるといふ）等があり、伊勢物語に擬した好色物に眞實伊勢物語がある。而してこれ等は、何れも岩波講座日本文學の日本文學書目解說上方・江戶時代に頴原退藏氏の解說されたものである。

第二に先づ平安朝期の物語・日記等に散見する伊勢物語中の歌の引用、卽ち所謂引歌について考へて見よう。土左日記に於ける業平の歌の引用（世の中に絕えて櫻の咲かざらば春の心はのどけからまし。あかなくにまだきも月の隱るるか山のはにげて入れずもあらなむ）が業平集によつたものであるか、又は伊勢物語に基いたものであるかは疑問としても、旣に第五節第三項第一に於て說明せる如く、宇

津保物語に至つては、勢語からの直接引用を幾多指摘することが出來る。落窪物語には卷の一にただ一箇所

降りぞ增れると忍びやかにいはれて、いかに思ふらむとはづかしうてそひ臥し給へり。

とあつて、

かず〳〵に思ひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまさる

を引いたものと思はれるが、古今集、業平集、伊勢物語の何れによつたか俄に斷定出來ない。しかし源氏物語に至れば、例へば、未摘花の卷の

然りや。年經ぬるしるしよとうち笑ひ給ひて、夢かとぞ思ふと打誦じて出で給ふを見送りて添ひ臥し給へり。

は

わすれては夢かとそ思ふおもひきやゆきふみわけて君をみむとは

を、須磨の卷の

渚に寄る浪のかつかへるを見給ひて、うらやましくもとうち誦じ給へる、さる

は

世の故事なれども、珍らしく聞きなされ、悲しとのみ御供の人々思へり。

いととしくすきゆくかたのこひしきにうら山しくもかへるなみかな

を引いたのに相違ないが、前者は古今集と伊勢物語、後者は後撰集と伊勢物語、その何れに據つたか、なほ疑を挾む餘地を存してゐるにしても、賢木の卷に

昔を今にと思ひ給ふるもかひなく、とり返されむもののやうに。

とあるのは確かに伊勢物語の

いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしを今になすよしも哉

を引いたものである。また若菜の卷に

萬の事飽かず面白きまゝに千夜を一夜になさまほしき夜の、何にもあらで明けぬれば、かへる浪にきほふも口惜しく、若き人々思ふ。

とあるのは

秋の夜のちよをひとよになすらへてやちよしねはやあく時のあらん

を、

かく言ひあへるを聞くにも胸打ちつぶれて、何かうき世に久しかるべきと打誦じひとりごちて、かの院へ皆參り給ふ。

は

ちれはこそいととさくらはめてたけれうき世になにかひさしかるへき

を、何れも伊勢物語より引用したものと推定される。殊にここで注意さるべきは源氏物語に於て青表紙本・河内本共に「何かうき世に久しかるべき」とあり、嘗て問題とされた總角の卷の

在五が物語書きて、妹に琴教へたる所の人の結ばむと言ひたるをみて、

と相並んで、式部が勢語異本の本文を採用してゐる點である。現存勢語諸本の中に「なにかうきよにひさしかるべき」といふ本文を有する本を求めれば、まづ朱雀院塗籠本がこれに該當する。繪合の卷には、

次に伊勢物語に正三位をあはせて、また定めやらず。

と伊勢物語の名を擧げてゐるが、これは從來屢々指摘されてゐるところである。狹衣物語の引歌中で最も注目すべきは、

蟲の聲々野もせの心地してかしがましきまでにみだれ合ひたるを我だにと

もどかしう思されけり。

とある「かしがまし」で、これは恐らく伊勢物語の異本例へば神宮文庫本の如きの

かしかまし野もせにすたく蟲の音よ我たに物は言はてこそ思へ

によつたと思はれる。次に

忍ぶ捩摺をえ知りたまはぬなるべし。

いでや、今は聞えじ、藻にすむ蟲なればぬ。

又何事よりも忍ぶもぢずりは様異に亂れまさり給ひぬべし。

見まくほしさにはいざなはれ給ひて、さのみもえつくろひやり給はぬを、

等とあるのは、

みちのくの忍もちすりたれゆゑにみたれそめにし我ならなくに

あまのかるもにすむゝしの我からとねをこそなかめ世をはうらみし

いたつらに行きてはきぬる物ゆゑにみまくほしさにいさなはれつゝ

を引いたものであるが、伊勢物語によつたか、古今集によつたのか不明である。し

かし例へば、

まいて近き程の御けはひなどをば千夜を一夜になさまほしう、鳥の音のつらき曉の別れに消え返り、

また

御有様の美しさは千夜を一夜にまもり聞ゆとも、厭くよあるまじく覺ゆるにも、

とある「千夜を一夜に」は伊勢物語の

秋の夜のちよをひとよになせりともことはのこりてとりやなきなん

秋の夜のちよをひとよになすらへてやちよしねはやあく時のあらん

を引いたものに相違ない。また

この繪どもを見給へば、在五中將の日記をいとめでたう書きたるなりけりと見るに、

と伊勢物語の名を擧げてゐるが如きは注意すべきものである。

次に謠曲の詞章の中にも伊勢物語を典據としたものが多い。一例を隅田川に取つてみると

武藏の國と。下總の中にある隅田川にも。着きにけり隅田川にも着きにけり。

とあるのは伊勢物語第九段の

武藏のくにとしもつふさのくにとの中にいとおほきなる河ありそれをすみた河といふ

に、

日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべけれ。

は、同じく

はやふねにのれ日もくれぬといふに

に、

彼の業平も此渡にて。名にしおはば。いざ言問はん都鳥。我が思ふ人は有りやなしやと。

昔にかへる業平も。有りや無しやと言問ひしも。

いざ言問はん都鳥。〳〵。我が思ふは東路に。有りやなしやと。問へども〳〵答へぬはうたて都鳥。

等は

名にしおはゝいさ事とはむ宮こ鳥わかおもふ人はありやなしやと

にまた

あれに白き鳥の見えたるは。都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ふぞ。

とあるのは

さるおりしもしろきとりのはしとあしとあかきしきのおほきさなるみつのうへにあそひつついをゝくふ京にはみえぬとりなれはみな人みしらすわたしもりにとひけれは

に

それは難波江これは又隅田川の東まで。思へば限なく。遠くも來ぬるものかな。

は

その河のほとりにむれゐておもひやれはかきりなくとをくもきにけるかな

とわひあへるに

に據つたものと思はれる。

また勢語一篇は連歌に對しても少からぬ影響を及ぼしてゐる。たとへば、大永元年十月六日に張行された百韵の連歌の如き賦伊勢物語連歌であつた。今この伊勢物語詞百韵の初めの部分を抄出すれば、

冬の日の夕かげまたぬ時雨かな　民部卿
寒るををくるかせはやみなり　親王御方
薄氷みづゆく河のをとたえて　中御門大納言
舟こぞりてもよぶわたし守　中務卿宮
友とする人はまれなる道のすゑ　帥大納言
雲なかくしそ月いづるやま　冷泉前中納言
いろ〳〵のもみぢの千種よるもみむ

かくこそ秋の露ははらはめ
いくたびか行ては來ぬるしかの聲
　我も田づらにかよふ夕ぐれ

而してこれ等は何れも伊勢物語中の

我ならてしたひもとくなあさかほのゆふかけまたぬ花にはありとも（天福本第三十七段）

あまくものよそにのみしてふることはわかゐる山の風はやみ也（第十九段）

そこをやつはしといひけるは水ゆく河のくもてなれはしをやつわたせるによりてなむやつはしといひける（第九段）

名にしおはゝいさ事とはむ宮こ鳥わかおもふ人はありやなしやととよめりけれは舟こそりてなきにけり（第九段）

もとより友とする人ひとりふたりしていきけり（第九段）

君かあたりみつゝをゝらんいこま山くもなかくしそ雨はふるとも（第九段）

神な月のつこもりかたきくの花うつろひさかりなるにもみちのちくさにみゆるおり（第八十一段）

君かためたおれる枝は春なからかくこそ秋のもみちしにけれ（第二十段）

いたつらに行てはきぬる物ゆへにみまくほしさにいさなはれつゝ（第六十五段）

うちわひておちほひろふときかませは我も田つらにゆかましものを（第五十八段）

に據つたものである。

近松の詞章で、伊勢物語より直接に影響されてゐるものも少からずある。それ等は何れも近松語彙の附錄に掲げられてゐるが、今その一二を示せば、最明寺殿百人上蘆の

淺間の嶽に立つ煙。その一筋をさまざまに。霞にえいじ雲に見て。歌人は思ひをのぶるとかや。

信州川中島合戰の

深き情もア、在原の。中將なりけるまめ男。戀ゆゑ旅をしなの路や。淺間

が嶽とつらねける。山の烟も我が思ひには。

とあるのは伊勢物語第八段の

しなのなるあさまのたけにたつ煙をちこち人のみやはとがめぬ

に據つたものであり、雪女五枚羽子板の

妾腹の孕ごもりつまも籠れり若草に。けふはな燒きそ武藏坊。

曾我五人兄弟の

武藏野や。我ぞ籠れる若草に。

生玉心中の

若草の妻もこもれる駕籠の中。

等は何れも第十二段の

むさしのはけふはなやきそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり

といふ歌によつて書かれてゐる。また傾城島原蛙合戰の

さそひ出せし白玉を。どこぞと問へば芥川しばしは。露の置き所。

加增曾我の

抱取りたるしら玉か。何ぞと問はば。魂も消ゆるばかりの心地なり。

井筒業平河内通の

后は夢ともしら玉か。何ぞと咎む犬の聲露と答へて消えぬべく。委しをれて出で給ふ。

關八州繫馬に

昔男の芥川。ちりも厭はぬ露の身を。草におくてふ白玉か。問へど答へず消えもせず。

等とあるのは何れも

しらたまかなにそと人のとひし時つゆとこたへてきえなましものを

なる歌を有する第六段を典據としてゐる。和歌に對して及ぼした影響についてはその例枚擧に暇がないから、今これを省略する。

第三に伊勢物語が如何に多くの研究書を成立させたかを概觀して本編を結ぶことにしよう。

勢語に對する研究の始められたのは果して何時からであつたか遽にこれを決

定し得ないが、若し第五段の

二條のきさきにしのひてまいりけるを世のきこえありければせうとたちのまもらせたまひけるとそ

或は第三十九段の

いたるはしたかふかおほち也みこのほいなし

等の如きを後人の加へた註記と認めるならば、研究史はそこまで遡らなければならないであらう。而して平安朝末期に於ては藤原仲實の綺語抄、藤原範兼の和歌童蒙抄、藤原清輔の和歌初學抄、奥義抄、顯昭の袖中抄等歌學書は何れも勢語中の歌詞をその研究對象の一とするに至つた。また六條藤家の顯輔は大外記中原師安より小式部内侍本を傳へて相傳の秘本とし、後顯昭もそれを書寫してゐたやうである。これに對して御子左家では、明月記の記載によれば、定家も亦この物語を書寫し校合した事實を知ることが出來、現在に於ても少くとも三種の定家本を殘してゐる。尤も定家以前に業平の男滋春が父の流を傳へて七箇條の髓腦を撰したと稱せられ、伊勢物語髓腦一卷があるが、もとより後人の僞作と思はれる。源經信の作と明記する和歌知顯集も鎌倉時代を下るものではあるまいが、果して經信の述作か否か頗る疑はしい。

ついで嵯峨の通路の記するところによれば、爲家は飛鳥井雅有に伊勢物語中の難儀を親しく講じた事實がある。室町期に下つては伊勢物語の講筵は益々盛に催され、今川了俊・冷泉持爲・正徹等の說を拾錄した聞書も現存し、一方堯孝・東常縁等も度々勢語の講述を試みたらしい。而して二條・冷泉兩家共に古註の說を交へて讀むのを普通としたやうである。しかし一條兼良の伊勢物語愚見抄は和歌知顯集或は十卷の古抄等の所謂古註を破壞して勢語の研究に一新紀元を劃したのである。宗祇も度々勢語を講じ、伊勢物語山口抄の外肖柏の伊勢物語肖聞抄、宗歡の聞書した宗歡聞書を成立させてゐる。續いて宗祇の說を受けた三條西實隆も亦幾多の講筵を開き、その聞書として伊勢物語直解があり、船橋宣賢の伊勢物語惟清抄がある。その子公條・孫實枝何れも伊勢學を傳へ、公條の敎を受けた紹巴には伊勢物語紹巴抄がある。細川幽齋は實枝の講釋聞書を基礎とし、惠雲院殿・大覺寺准后義俊・聖護院准后道增・宗養・紹巴等より傳はりたる說に愚見・肖聞等の諸抄を參考

して伊勢物語闕疑抄を大成した。同じく實枝から伊勢物語の講說を受けたもの の一人に一華堂乘阿があり、その門下の切臨和田以悅は師說を主とし、諸抄に用捨を加へて伊勢物語集註を著した。集註の說を踏襲したものに淺井了意の伊勢物語抒海がある。この頃雲上に於ても、後陽成天皇は惟清抄を本註として愚見抄・肖聞抄・稱名院聞書等に師說・今案を交へて伊勢物語愚案抄を、後水尾天皇は闕疑抄を基として伊勢物語御抄を著され、その御講釋の聞書に伊勢物語勅講抄がある。幽齋に學んだ松永貞德の門下加藤盤齋には闕疑抄初冠と伊勢物語新抄の二著があり、同門の北村季吟は口授祕說と稱せられた舊說を集め、從來の註釋研究を整理して伊勢物語拾穗抄を世に示した。また高田宗賢によつて伊勢物語祕訣抄が著された。

次いで契沖は勢語臆斷を作り、新學風を起して舊註を批判し、この物語の內容・題號・作者等について自由なる考說を試みた。荷田春滿は伊勢物語童子問を著し、賀茂眞淵は伊勢物語古意に於て、物語といふ名の事、伊勢物語と名づけたる事、業平朝臣の自記ならぬ事、伊勢の御の書きたらぬ事、時代のたがへる事、作れる時代の事、古本今本又作者の事、むかし男といふ事の總論八箇條に於て創見を述べ、學術的研究の大綱を示した。なほこの外岨山春幸の伊勢物語章甫鈔、上田秋成のよしやあしや、五井純禎の勢語通、賀茂季鷹の伊勢物語傍註、清水濱臣の伊勢物語添註、僧似雲の伊勢物語殘考、齋藤彥麿の勢語圖說抄、五十嵐篤好の伊勢物語披雲を始め種々の註釋書がある。屋代弘賢の參考伊勢物語は拾穗抄を底本とし、朱雀院塗籠本・爲家本・時賴本・爲相本・眞名本を以て校合したものであり、藤井高尙の伊勢物語新釋は本文を定家本の外朱雀院塗籠本・眞名本・知顯抄等によつて校定し、諸註の宜しきを拾ひ、自らの創見をも加へたものである。前者はその本文研究に於て、後者はその註釋に於て何れも優れてゐる。又橋守部の伊勢物語箋、佐々木弘綱の伊勢物語俚言解も注目すべきである。

かくの如く、日本文學研究史上、伊勢物語の研究は、萬葉集・古今集・源氏物語と共に四大分野を形成するものであつて、その地位は非常に重い。伊勢物語が日本文學ならびに日本文化に與へた影響の如何に甚大であるかは、この一面に於ても見ることが出來る。

以上略述した如く、伊勢物語が後世の日本文學に大きな影響を與へたことは物語の祖と稱せられた竹取物語以上である。その構想の幻想的である點から云へば、竹取物語に劣り、雄大である點から云へば、源氏物語に劣る。しかし多種多樣なる戀愛物語が、歌文相俟つて藝術的氣品を具備してゐることは決して前二者に劣らない。一々の說話がいづれもまことなる生活の姿を物語つて、哀愁と微笑とを讀者に與へる。かざりけなく表現せられた生活の多樣を貫く純眞な情緒が伊勢物語のもつ大きな魅力である。この物語の文學史的に注意すべきことは抒情詩的なものが敍事詩的なものに展開して行く傾向であり、歌集が歌物語となり更に物語へと發展して行く傾向であると同時に、後代の日本文學及び文化全般に與へた影響の甚大なる點であると言はなければならない。

昭和九年五月廿一日印刷
昭和九年五月廿五日發行
定價金十圓
著者　池田龜鑑
發行者　東京市麻布區一本松二七　立木朋吉
印刷者　東京市神田區錦町三ノ十七　白井赫太郎
精興社印行
發行　東京市麻布區一本松二七　振替東京六四九五二番　大岡山書店

池田龜鑑著	伊勢物語に就きての研究 校本篇	菊判圖多 定價八圓
池田龜鑑著	伊勢物語に就きての研究 研究篇	菊判圖多 定價八圓
橋本佳著	校本夜半の寢覺	菊判四五〇頁 定價三圓五十錢
高野辰之著	古文學踏査	菊判五六〇頁 定價五圓五十錢
高野辰之著	曝涼漫記 書物篇 書畫篇	近刊
武田祐吉著	國文學研究 萬葉集篇	菊判四四〇頁 定價三圓八十錢
武田祐吉著	國文學研究 神事文學篇	近刊
澤田總清著	懷風藻註釋	四六判四五〇頁 定價三圓八十錢

武田祐吉著	國文六國史 日本書紀上	新菊三四〇頁	定價二圓五十錢
今泉忠義著	國文六國史 續日本紀上	新菊三九〇頁	定價二圓八十錢
武田祐吉著	國文六國史 三代實錄上	近刊	
國學院大學	校訂延喜式	菊判三册索引附	定價二十圓
池邊眞澄著 加藤玄智校	校訂古語拾遺新註	菊判七三二頁	定價十圓
栗田寛著 加藤玄智校	古語拾遺講義 稜威男健	菊判五三〇頁	定價六圓
伴信友著 橫山重校	高橋氏文考注	四六判二八〇頁	定價二圓五十錢
伴信友著 橫山重校	鎭魂傳 附 ミタマノフユ考 ウチツシマ論	四六判二五〇頁	定價二圓五十錢

井上通泰著	播磨風土記新考	菊判七〇〇頁	定價七圓五十錢
後藤藏四郎著	出雲國風土記考證	四六判四二四頁	定價三圓二十錢
後藤藏四郎著	肥前國 豐後國 風土記考證	四六判二〇〇頁	定價二圓三十錢
栗田寛著 後藤藏四郎補	標註古風土記 常陸	四六判二三〇頁	定價二圓三十錢
栗田寛著 後藤藏四郎補	標註古風土記 出雲	四六判三八〇頁	定價三圓二十錢
栗田寛著	古風土記逸文	四六判四〇〇頁	定價三圓五十錢
彌富破摩雄著	萬葉集纒攷	菊判三五〇頁	定價三圓二十錢
豐田八十代著	萬葉地理考	四六判附地圖	定價三圓八十錢

河野省三著	國學の研究	菊判四七〇頁	定價四圓二十錢
河野省三著	日本精神發達史	新菊三六〇頁	定價二圓八十錢
河野省三著	日本精神の研究	菊判	定價
野村八良著	上代文學に現れた 日本精神	四六判二五〇頁	定價 二圓
豐田八十代著	國文學に現れたる 佛教思想の研究	四六判二三〇頁	定價一圓五十錢
伊東多三郎著	國學の史的考察	四六判四三〇頁	定價二圓八十錢
栗田勤著	水藩修史事略	四六判四二〇頁	定價三圓二十錢
三島復著 山田準閲	王陽明の哲學	四六倍六一〇頁	定價七圓五十錢

島津久基著	國民傳說類聚 前輯	四六判五五〇頁	定價三圓八十錢
岩永胖著	日本文學の方法論	四六判三二〇頁	定價二圓三十錢
湯澤幸吉郎著	室町時代の言語研究	菊判四〇〇頁	定價四圓二十錢
湯澤幸吉郎著	解說日本文法	新菊五八〇頁	定價三圓八十錢
富士谷成章著 松尾捨治郎校	あゆひ抄	四六判三二〇頁	定價二圓五十錢
富士谷成章著 松尾捨治郎校	かざし抄 附よそひ抄	四六判	定價
山崎美成著 藤田德太郎校	歌曲考	四六判二五〇頁	定價 二圓
彌富破摩雄校 横山重校	伴信友家集	四六判四五〇頁	定價三圓二十錢

竹内理三著　日本上代　寺院經濟史の研究　菊判六〇〇頁　定價六圓

竹内理三著　奈良朝時代に於ける　寺院經濟の研究　新菊四五〇頁　定價三圓五十錢

細川龜市著　日本中世寺院法總論　新菊二八〇頁　定價二圓

幸田成友著　日本經濟史研究　菊判九三〇頁　定價十圓

幸田成友著　讀史餘錄　四六判四〇〇頁　定價二圓八十錢

横山由清著　幸田成友校　日本田制史　菊判三七〇頁　定價四圓二十錢

橋本增吉著　東洋史上より觀たる　日本上古史研究　菊判六三〇頁　定價六圓

コルデイエ著　日本書志　原木復製　四六倍判　定價二十五圓

雪山俊夫著　ニーベルンゲンの歌　基礎の研究　菊判六〇〇頁　定價六圓

シュタイシェン著　吉田小五郎譯　切支丹大名記　菊判四三〇頁　定價四圓五十錢

吉田小五郎著　聖フランシスコ・シャヂエル小傳　四六判三五〇頁　定價二圓五十錢

古部百太郎著　聖地紀行　四六判一七〇頁　定價一圓八十錢

松村武雄著　民俗學論考　菊判五〇〇頁　定價五圓二十錢

フレーザー著　永橋卓介譯　社會制度の發生と　原始的信仰　四六判三二〇頁　定價二圓五十錢

永橋卓介　内田元夫譯　フレーザー　呪術と宗教　四六判二三六頁　定價一圓八十錢

ベヤリンググールド著　今泉忠義譯　民俗學の話　四六判二五〇頁　定價一圓八十錢

折口信夫著	古代研究 國文學篇	菊判六五〇頁 定價六圓五十錢
折口信夫著	古代研究 民族學篇(1)	菊判六〇〇頁 定價六圓
折口信夫著	古代研究 民族學篇(2) 總索引	菊判七〇〇頁 定價六圓五十錢
中山太郎著	日本民俗學 神事 風俗 歷史 隨筆	四六判四册 十二圓四十錢
中山太郎著	日本巫女史	菊判八〇〇頁 定價七圓五十錢
柳田國男著	海南小記	四六判四〇〇頁 定價三圓二十錢
柳田國男編	鄉土會記錄	四六判二五〇頁 定價二圓五十錢
松岡靜雄著	民族學より見たる 東歌と防人歌	四六判四五二頁 定價三圓二十錢

佐伯有義 補訂	神道名目類聚鈔 附 神道問答	菊判三五〇頁 定價三圓八十錢
多賀神社編	多賀神社史	菊判 圖多 定價三圓八十錢
小林靜雄著	能樂史料 第一輯	四六判三五〇頁 定價二圓八十錢
小林靜雄著	能樂史料 第二輯	四六判 定價
野々村戒三著	近畿能樂記	四六判三〇〇頁 定價 二圓
戸川秋骨著	能樂禮讃	四六判圖七五枚 定價三圓二十錢
高橋龍雄著	茶道	四六判圖四二枚 定價三圓八十錢
高橋龍雄著	茶道名物考	四六判二册 定價七圓五十錢

白井光太郎著 矢野宗幹校 改訂增補 日本博物學年表 菊判三六〇頁 定價三圓八十錢

上村六郎著 日本上代染草考 菊判圖多 定價五圓五十錢

小金井良精著 人類學研究 菊判六〇〇頁 定價五圓五十錢

長谷部言人著 先史學研究 菊判六五〇頁 定價六圓五十錢

梅原末治著 銅鐸の研究 四六倍判二册 定價三十圓

梅原末治著 鑑鏡の研究 菊判二八八頁 定價六圓五十錢

高橋健自著 日本原始繪畫 菊判二〇〇頁 定價三圓八十錢

石上神社編 石上神宮寶物誌 四六倍判圖多 定價七圓

田中市郎衛門校 袖中抄 前篇（高松宮御本） 四六判四〇〇頁 近刊

彌富破摩雄 横山重校 中島廣足全集 第一篇 菊判四二〇頁 定價四圓五十錢

横山重 彌富破摩雄校 中島廣足全集 第二篇 菊判五七〇頁 定價六圓

木野戸勝隆著 百日參籠 附 祿宮文書要記 菊判六三〇頁 定價六圓

佐佐木信綱著 歌集鷲 四六判一九〇頁 定價一圓七十錢

彌富破摩雄著 歌集青楓集 四六判二四〇頁 定價一圓八十錢

西田宏譯 タッキス ゲルマニア 四六判一〇〇頁 定價一圓

和田萬吉著 改訂重刊 古版地誌解題 菊判二五〇頁 定價三圓八十錢

藤井乙男序 宇田久著	作者別俳諧七部集		
近刊	古板俳諧七部集七	續猿蓑定本	新菊判六〇〇頁 定價三圓八十錢
近刊	古板俳諧七部集六	炭俵定本	寫眞版一〇四頁
藤井乙男編著 宇田久編著	古板俳諧七部集五	猿蓑定本	寫眞版一二〇頁 定價二圓七十錢
藤井乙男編著 宇田久編著	古板俳諧七部集四	ひさご定本	寫眞版三二頁 定價一圓二十錢
藤井乙男編著 宇田久編著	古板俳諧七部集三	曠野定本	寫眞版一九八頁 定價三圓五十錢
伊藤松宇編著 宇田久編著	古板俳諧七部集二	春の日定本	寫眞版三六頁 定價一圓二十錢
伊藤松宇編著 宇田久編著	古板俳諧七部集一	冬の日定本	寫眞版三四頁 定價一圓二十錢

913.32
I.32

終